

# 自由意志

村井觀亮

## (一)

自由とは何であるか。云ふ迄もなく自由は人間の本質である。

私はたしかに自由である。けれども私は自由を対象的に認識することは出来ない。私は私の何処を探しても自由を見付けることが出来ないのである。私が私の自由を見付けるためには、物を対象的に観る立場から実践する立場に、又知的に考える立場から意志的に行為する立場に移らねばならない。実践的行為的自我に於て私は初めて自由を見出すことが出来るのであるが、然し行為的自我が若し單なる実践理性であり、その自由が單に理想主義的先驗的自由たるに過ぎないとすれば、私は折角自由の相を見ながら自由の中味を得ることが出来ず、又自由の形式を与えられながら事実その主体となることが出来ない。成程、其れは哲學者の自由であるかも知れない。が私の自由ではない。又當為を原理とする実践理性は、私に自由の所在を教えて呉れるかも知れない。然し、それだけでは自由も結局私には手の届きかねる美しい一輪の花か、一羽の青い鳥にしか過ぎない。私の求めるものは形式的自由

ではなくして実質的自由であるが、然しかゝる望は淡い一場の夢であらうか。否な、決してさうではない。私が思い切つて理想主義的な理性の立場を捨て、卒直に現実の自我に目覚める時には、求めて得られなかつた自由も却つて私の此の身の上に実現する。そして此の事の可能なることは、既に諸の哲学によつても語られているが、之れを如実に私に示すものは宗教である。宗教的自覚に於て人は初めて眞の自由をわが身に体得することが出来る。

自由を求める私はかくて理想主義的な実践理性の立場から、現実を直視する宗教の立場に轉換することを余儀なくされるのであるが、然し此の事は直ちに実践理性の廃棄を意味するものではない。それどころか、宗教的自覚は嚴肅なる倫理的自覚を媒介とすることによつて深さを加えることを思へば、宗教的自覚に取つても倫理的自覚は缺くことの出来ない重要事である。

以上は自由に対する私の基本的な考えであり、これに就いて詳説することが此の一篇の目的である。が紙数に限定せられたため、最後の宗教的自由に迄手が及ばず、辛ふじてカントの実践的先驗的自由を見得るに過ぎないことは遺憾である。

## (二)

自由とは一体如何なる事を意味するか。通常自由には消極的な面と積極的な面とがあると言はれてゐる。消極面に於ける自由とは自己以外の力に依つて拘束されないといふ意味の自由である。所が他からの拘束を受けない事は、他面から見れば自己の欲するがまゝに意志し行爲することが出来るといふ事である。そこで我々の意志や行爲が他から拘束されないといふ事は、自己の欲するがまゝに意志したり行爲したりすることが出来るといふ可能性を意味することとなり、自由の消極の意味は転じて積極の意味となるのであるが、然らば此の積極的自由は、何事でも任意に欲し任意に行爲することが出来るといふ恣意を意味するであらうか。成程、鳥が自己の欲するがまゝに大空を駆け廻ることは、鳥に取つてはたしかに自由であり、而も唯一の自由であらう。鳥ばかりではなく、人間が慾望の動くがまゝに行動する時も亦、そこには一つの自由があり、自由がその人によつて享樂せられていふと言ふことが出来るであらう。そして多くの人々が自由を此のやうな恣意であると信じている事は、氣まゝな人を自由人と呼んでゐる事にみても明かである。そしてそれは全く無意味なことではなく、矢張り何分かの意味を持つてゐると思はれる。けれ共自由が若し此の様な恣意しか意味しないとすれば、それは動物の自由と少しも異なる所がない。人間が自由であるといふ時には、恣意とは違つた別の自由を意味するやうに思はれる。けだし恣意を支配するものは單なる衝動や慾望であるが、人間の自由に於ては理性或は意

志が主体である。所で恣意の起動力である衝動や慾望は、自分のものでありながら自分の勝手に左右することの出来ない必然性と強制力とを有し、自己に取つては却つて他である。かゝる衝動や慾望に支配せられる限り、恣意は自由どころか衝動や慾望に束縛せられて全くその奴隷である。然るに意志は自己自身であり常に自律的であつて、こゝにこそ眞の自由があり、動物とは違つた人間の自由がある。

かくて人間の自由は恣意ではなくて意志の自由であることが一応予想されるのであるが、然らば意志が自由であるといふ事は一体如何にして可能であるか。恣意が自由であるかの如くに見えて、其の實不自由であり束縛であるのは、恣意の抛つて以つて立つところの衝動や慾望が自己のまゝにならぬが故であり、之に反して意志が自由であると言はれるのは、意志が自己そのものであるり其の作用が凡て自律的であるからといふのであるが、然しそれならば何故に意志のみが自己であり自律的であるといふ事が言へるか。意志と雖も結局一つの自然現象である事は、衝動や慾望と全く同様である。にも係らず何故に人は意志にのみかゝる特權を与へるか。万物は自然因果の法則によつて支配せられるといふ事は、自然科学の要請であり寧ろ鉄則でさへあつて、此の法則の前には凡ゆる存在は平等である。單なる自然物であらうと動物であらうと、又衝動であらうと意志であらうと、凡ては齊しく此の鉄則によつて支配せられる。従つて如何に高尚にして且つ微妙な精神作用であらうと、苟もそれが人間の心理現象である限り、其れには必ず其れ相應の先行條件がある筈である。にも係らず意志の

みは自由であるといふのは、一体如何なる理由によるであらうか。この様に考へて来ると、今迄当然の事のやうに思はれた意志の自由も怪しくなり、考えれば考える程六つかしくなるばかりである。恣意とは何か、意志とは何か、必然とは、自由とは。抑、自我とは何であるか。この様に問題は問題を生み、自由の問題は終には自我の問題に迄発展し、自我の問題が解決されない限り自由の問題も解決されない事となる。自由はギリシャの昔から多くの学者によつて取り扱はれて来た所であるが、自我の自覚を以て始まつたルネッサンス以後の近世哲学に至つて、自我と共に自由の問題が一段と大きく浮び上り、盛んに且つ眞剣に論議せられる様になつたのは寧ろ当然の事である。まことに近世哲学者、殊にドイツ観念論の哲学者達は自我の研究者であると共に自由のこよなき理解者であつた。がその第一人者は言ふ迄もなくカントである。彼によつて自由に関する従来の学説は一変せられ、自由は人間の本质と迄なつた。そしてその思想は後世、自由を探索せんとする学者の一度は必ず潜るべき関門でさへある。此の意味に於て私は先づ彼の自由に就いて見てみたい。

### (三)

カントの自由が如何なるものであるかを理解せんが爲めには、いきなり彼の自由にぶつかるよりは、寧ろ理論理性の批判によつて得られた彼の現象論に就いて一瞥する必要がある。けだし彼にとつて爲された現象と実在との截然たる區別は、彼の哲学の根本的特質であり、自由に伴ふ諸の難問を解決する唯一の鍵である

から。そこで私は極く簡単に彼の現象論を考察する。

周知の通りカントは認識の対象を以て我々の主観を離れて実在する物自体とはせず、寧ろ主観の手によつて構成せられた現象であるとした。認識的反省を缺く素朴な常識に取つては、自然は認識主観に与へられたものであり、主観とは何の關係もなく其れ自体として其処に存在するが、然し反省せられたる主観に取つては、自然は決してかゝるものではなく、認識主観である理論理性が直観や悟性によつて先験的に構成せるものである。主観の構成するものでありながら能く其れが客観性を保ち得る所以のものは、其れを構成する主観が、個我の内に働きながら超個人的であり普遍妥当且つ必然的である、即ち客観性を持つてゐるからに外ならない。認識の客観性の根拠は従つて主観の外にはなくて主観の内にある。主観が客観性を持つてゐるからこそ現象としての自然にも客観性がある。かくて自然に関する認識は、一部の学者の主張する様な蓋然的なものではなくて、普遍妥当且つ必然的なもの即ち容観的であり、凡ゆる自然界は自然因果の法則によつて支配せられ、その機制は全く必然的である事が明かになつたのである。

かくて認識の対象たる自然界は物自体としての実在ではなくして現象であり、例外なく自然因果の法則によつて支配せられる必然的存在となつた。所で問題は自我である。形而上学としての従来の合理的心理学は、*cogito*としての自我を实体なりと独断し、その非物質性や不滅性等を考察して来たのであるが、然し其れは根本的に誤つてゐる。けだし思惟する自我は飽く迄も認識主観であり、それなくしては認識も認識たり得ない所の、認識成立の條

件であり、そのみによつては何等の客観も与へられない思惟に於ける統一たるに過ぎず、従つてこれに対して実体の範疇を適用する事は出来ない筈である。何者かを実体とする為めには、一度此れを対象として観る事が必要であるが、然しどこ迄も認識成立の條件であり思惟に於ける統一に過ぎない思惟的自我を対象的に観る事は絶対に不可能であるから。かくて合理的心理学が思惟する自我を実体化することは誤りであることになつた。尤も思惟的自我を内観し知覚等の諸の経験と結び付けて之を認識しようとするれば、それは最早合理的心理学でなくして學問に属する所の経験の心理学であり、自我に関する一種の自然学である。そして其れによつて明かにされるものは、最早實在としての思惟的自我ではなくして現象としての自我であり、現象間に行はれている自然因果の法則である。

かくてカントは合理的心理学の批評によつて自我の実体性を否定し之を現象化したのであるが、然し此れによつて彼が自我の實在性や不滅性をも否定し去つたと見るべきではなく、唯だその認識を否定したに過ぎないのである。元來、理論理性の認識能力は經驗の対象即ち現象内に限られ、決してその埒外に逸脱する事は許されない筈であるのに、その使用を誤つて之を能力以上の超驗の対象たる理念に迄適用し、内的現象に過ぎない思惟的自我を實體なりと独断する、こゝに合理的心理学の誤謬があるが、其れは亦理論理性一般の自己を忘れた僭越でもある。カントが合理的心理学を批判し徹底的にその誤謬を抉り出したのは、実は理論理性のかゝる僭越を抑え、理性をして自らを誤らしめず、「其れに

反対するあらゆる可能的主張に対して安全にする」ためのものであつた。彼は自我の實體といふ様な超經驗的存在を、「我々自身の單なる理論的認識から洞察せんとすること」には断念しなければならなかつたが、理性をその本来の領域、即ち「目的の秩序」のうちへ置き、理性が「自然秩序の制約のうちに制限」せられず、「經驗と生とを超越」する權能を与へられ、やがてその上に何ものかを建設し得る「永続的基礎を供給する」こと迄もは諦めなかつた。事實この建設はやがて實踐理性批判に於て行はれ、實在としての自由意志の確立となつて現はれたのである。

カントの合理的心理学に対する批評の眞意はかくの如く積極的な建設を目的とするものであつた。が然し其れは飽く迄も嚴しき理性の自己批判を通じたものでなければならぬ。かゝる意味に於てカントの合理的心理学に対する批評は苛責なきものであり、理性の僭越が容赦なく責められるのであるが、然し理論理性の僭越は決して此れ位のものではない。理論理性は現象内に限られた自己の能力を再び忘れ、現象としての自然界の上に理念としての世界概念を作り上げやうといふ大それた謀反を企てるのである。然しその結果はどうであるか。言はずと知れた其れは二律背反である。一進一退どうにもならない厄介な自己矛盾である。而も更に困つた事は、かゝる二律背反が單なる詭辯ではなくして、「凡ての人間の理性がその進展に於て必然的に突き当らねばならない問題であり、定論が反論と共に具有する仮象が、人間が之を洞察すれば直ちに解消し去る底の技工的仮象ではなくして、一箇の自然的且つ不可避的仮象であり、」「滅却せんとして滅却し能はざる」

深刻無比な仮象である、といふ一事である。二律背反が單なる詭辯であるならば、その詭辯であることを知る事によつて我々は容易に其れから逃れ去る事も出来やう。が其れが人間的理性の進展に於て必然的に突き当らねばならない所のものであり、其れの有する仮象も自然的且つ不可避的であるとすれば、かゝる二律背反に陥る事は最早我々の意志を以てしてはどうする事も出来ない運命であり、禁斷の果実を食べて以来人間に課せられた十字架であると言はざるを得ない。かゝる運命十字架を背負へばこそ、人間的理性は己れの能力をも忘れ、無謀にも限界概念たる絶対者を認識せんとし、互に矛盾する事を同一の者に就いて同時に立言する、而もその何れをも眞理であると錯覺し、假令その錯覺が錯覺と知られても、錯覺の有する魅力につられてその惑ひを断ち兼ね、あらぬ戲論にうつゝを抜かしてゐる。一体理論理性に取つて此れ以上の自己矛盾があるであらうか。知ることを本質とする理論理性が、最早どうすることも出来ない無知に突き当る程大きな矛盾は理論理性にはないからである。そして此の自己矛盾は理論理性に取つては自己否定であり、自殺であり、最深の苦悩である。二律背反の眞相は實にかくの如きものであるが、然じ思ふにかゝる二律背反も結局は人間的理性が一大飛躍を遂げんとする進展途上の必然的出来事であるとすれば、自己否定は自己肯定に、自殺は甦生に轉換する必然的契機であり、苦悩も結局かゝる轉換に伴ふ生みの苦しみである。従つて二律背反は中途半端で妥協させず、寧ろ各々の主張を十分に發展させ、出来るだけその矛盾を拡大し、自己矛盾の眞相をまざ／＼と理論理性に見せつける事によつて、

理論理性をのつびきならぬ窮地に追ひ込み、自己否定を徹底させるべきである。眞の自己肯定と再生とは、自己否定の徹底に於てのみ期待し得るからである。かくてカントはかゝる「有益なる誤謬」を四箇の二律背反の下に詳述し、理性の自己矛盾を残りなく白日の下に曝け出すのであるが、然らばその中の一組であり、我々の当面の問題となつてゐる所の、自由と必然とは如何様なる二律背反であり、又如何様にして有益なる誤謬であらうか。我々はカントと共に自由と必然とをして各々その主張を十分に語らしめやう。

#### 定 立

自然の法則に従ふ原因性は、世界の現象が悉くそれから導出され得る原因性ではない。現象の説明にはなほ自由による原因性を前提することが必然的である。

#### 反 定 立

自由なるものなし、世界における一切は自然の法則に従つてのみ生起す。

定立に就いて細説すれば次の様になる。自然法則に従ふ原因性以外何等の原因性がないと仮定すれば、事物の生起の原因が無限に遡られなければならないといふ事のために、生起は常に第二次的なものに過ぎず、第一次的起始といふものはどこ迄遡源しても得られない。従つて因果系列の完全性といふものは得られない。所が自然法則の成立は「先天的に十分に限定せられた原因なくしては何ものも生起せぬ」といふ所にこそ成立する。故に一切は自然法則に従つてのみ可能なるかの如く主張する命題は自家撞着を

含む。かくて他によつて限定せられずそれ自らによつて生起するところの一種の原因性、即ち自然法則に従つて進行する現象の系列を自ら始めるところの原因の絶対的自發性即ち先驗的自由が想定せられる。ところで此の絶対的第一起始は時間上のそれではなくして、原因性に関してのそれである。例えば私が今、全く自由に自然原因の必然的に限定する影響なくして、私の椅子から立上つたとすれば、無限に進行する自然的結果を伴へるこの出来事に於て端的に新系列が始まつたのである。時間的にいへば、この出来事は先行系列の継続に過ぎないけれども。蓋しこの決心と行為とは單なる自然的作用の單なる継続ではない。却つて限定的自然原因はこの出来事に関して決心と行為との前に於て止んでしまつてゐる。

以上の自由肯定論に対して必然論は次のやうに主張する。世界の事変がそれに従つて生起し得るであらう一種特別な原因性、即ち端的に自ら始める能力があると仮定する。さうすると世界の事変を端的に自ら生起せしめる此の一種特別の能力を恒常な法則に従つて限定する先行條件が一つもないことになり、又はたらしきの起始は決してその状態から生起せぬところの一つの状態を予想することとなる。しかし、かゝる事は因果律に反する。自然の法則からの自由(独立)は強制からの解放であるが、それはまた凡ゆる規則の指導からの解放でもある。自然と自由とは法則性と無法則性との如くに相違する。又教學的眞理には時間的な始めも終りもない様に、自然界には諸の実体の常住と実体の状態の變化の系列が常住することが予想せられる。かゝる実体には断じて先驗的能

力を与へる事は出来ない。かゝる能力を実体に認めるとすれば、一般的法則に従つて相互に限定し合ふ自然やその經驗を、單なる夢幻から區別する經驗的眞理性の表徴が大部分失はれてしまふ。若し自由を認めるならば、自然法則は自由によつて不斷に變更せられ、秩序整然たる現象の活動は混乱せられ支離滅裂となるであらう。

以上が自由と必然とに関する二律背反であり、その有する仮象は共に理性に取つて甚だ魅惑的である。前者が決心と行為といふ人間の實踐的事実を捉へ、それを論拠として端的に自ら始める自發的自律的原因性、即ち先驗的自由を美しく魅惑的に説けば、後者は自然因果の法則といふ自然的事実に立つて、一切現象の、従つて人間の凡ゆる行動の必然性を力強く主張する。理性に取つては、どちらにも理窟があり、共に眞理を含んでゐるかの如くに思はれ、どちらにも心を惹かれるのであるが、然し自由と必然とは結局互に相容れない矛盾概念であり、一方が眞であれば他方は必ず偽であつて、同一の事項に就いては同時には必ず両立し難いのである。それにも係らず今理性が両者を同時に肯定せざるを得ないとすれば、これこそ正に二律背反であり、理性の自己矛盾である。而も此の矛盾は、理性が自己の能力を忘れ自己の領域を逸脱し、現象を實在化して之を理念の下に統一せんとする野心を捨て去らない限り、益々深刻化するばかりである。理性は今や絶対絶命の関頭に立ち、最早施すべき術を持つてゐない。死を生に転ずるの秋は正に今である。理性は須らく踵をかへして自己本来の領域に歸り、現象としての自然界を対象とし、そこに知識を得て自ら樂

しむべきである。さうすれば、飽く迄も物を対象化して觀察し、之を自然因果の法則の下に秩序づけ、知識の体系を作ることの本質とする理論理性に取つては、自然界は徹底的に必然的なものとして現はれ、決して自由とは見えない。認識の対象たる自然界が決して物自体としての實在ではなくして寧ろ現象であり、例外なく自然因果の法則によつて支配せられる必然的存在であることは、既に明かになつた所であるから。かくて二律背反に苦しんだ理論理性の住むべき天地は自ら確定した。自然因果の必然の法則によつて支配せられる現象としての自然界こそ唯一の彼の天下である。

ところが此の事は他面から言へば理論理性の活動範囲の限定でもある。理論理性の対象は現象としての自然界であるが、若し物自体としての實在の世界が在るとすれば、理論理性は最早之に就いて兎や角語る権限はない。二律背反の苦悩がかかる権限を忘れた越權に基くことを知れば、理論理性は今更再びかかる愚をくり返へさないであらう。従つて今、我々がかかる實在を在ると仮定しても、理論理性は之を積極的に否定することもしないであらう。要するに理論理性は最早實在が在るとも無いとも言はない。そこで我々は安心して實在が在ると仮定し、之を自由であるとしたならばどうであらうか。現象としての自然界は必然であるが、物自体としての實在は自由である。これならば二律背反に陥る恐れもなく、自由と必然とは同時に両立し得るが如くである。が然らば兩者を同時に成立させ、之を一身に具してゐるものは一体何か。云ふ迄もなく其れは人間である。

人間は一面に於ては自然的時間的存在であるが故に、現在我々の有する身心やその凡ゆる活動は、凡て先行條件によつて規定せられるが故に必然的である。が然し他面我々が同時に物自体として實在であるとすれば、我れ自体は如何なる時間的制約をも離れて全く自由であることが出来るであらう。カントはかかる想定の下に人間の性格を経験的性格と可想的性格との二つに分け、前者を必然、後者を自由であるとした。経験的性格は現象として他の諸の現象と恒常的自然因果の法則に従つて関連し、感性的行為の原因となる。之れに対して可想的性格は一方現象としての行為の原因であるが、感性的如何なる制約をも受けず、又それ自身現象でもない。前者が現象としての自我であるに対して、後者は實在として自我である。實在としての自我は時間の制約を受けず、従つてそれ自身不生不滅であり、凡ゆる経験的制約の外に超然として存在する。それがどのやうな性格であるかは勿論認識さるべくもない。認識せられたものは既に現象にしか過ぎないから。けれども此のやうな性格が経験的性格に即して思惟せられねばならない。経験的性格の根底に在ると考へられねばならないのである。かくて我々は一方に於ては経験的性格の持主として常に感性界の一現象であり、その限り又自然の一部であり、自然因果の法則の下に他の諸の自然物から限定され影響され、他の自然物と同様に自然的生活を営むものであるが、然し他方に於ては實在としての可想的性格者として、感性界の如何なるものからも限定されず、如何なる影響によつても左右されず、凡ゆる自然的法則から独立であり自由である。

可想的性格としての人間は、このやうな独立と自由とを持つてゐるが、彼は同時に當為の意識を持つ。當為は「汝為すべし」と命令する。當為の実践は、固より自然的制約の下に於てのみ可能であるが、此の自然的制約は行為者の決意性そのものを左右せず、唯だ現象としての決意に与り、意欲に影響するのみである。當為としての可想的性格は、現象に現はれるがまゝの物の自然的秩序には服従せずして、却つて完全なる自發性を以て理念による自己・獨自なる必然的秩序を構成し、之を経験的自然界の上に実現しようとする。従つて可想的性格は出来事の系列を自ら始める能力であり、ものを創造する力である。他からの制約を受けない意味の自由を消極的自由といふならば、當為に従つて内から創造する自由を積極的自由といひ得る。

かくて我々人間は、經驗的性格者としてはその存在から行動の一切に至る迄凡て必然的である。故に人間を若し單に觀察するといふ理論的立場から研究するならば、人間は自然的必然的存在となる。けれども此の同一人間も、若し之を實踐的観点から観るならば、そこには自然的秩序とは全く別な規則を見出し、別な人間の相を発見するであらう。自然因果の法則に縛られる自然的自我と常に俱に在りながら、何者にも制約せられず、却つて自己独自の世界を創造する無制約的制約者、即ち先驗的自由の自我がそこに在るのである。

所がこの様な自我は未だ現實存在的とはなつてゐない。又それは証明されてゐない。我々は未だ實踐的立場には立たず、理論的・觀照的立場に依然として踏み止まつてゐるからである。仮

令理論理性の使用を現象に限り、理念への適用を禁止したとしたところが、それは未だ理論的觀照的立場から實踐的行為的立場への轉換を直接意味しないからである。理論理性に許されることは、自由の原因性に対して自然は少くとも矛盾せぬ事を示す、といふ位のことであらう。そこで次の問題は、理論理性から實踐理性へ、觀照的立場から行為的立場へ轉換し、可想的性格としての自由に現實性を与へ、單に考へ得られる自由を我々自身のものにするものである。

#### (四)

凡そ自然因果の法則が支配する自然界に於ては、それに屬する凡てのものは例外なく之に支配され、一瞬と雖もこれから免れることは出来ない。然るに實踐界に於てはこれと事情を異にし、人は必ずしもその作るところの原理の下に立つとは限らず、離れやうと思へば離れることも出来る。けれど實踐的規則は之に彼はないう者のあり得ることを予想した上の命令であるからである。道德的規則はかくの如く自然的法則とは異なるが、それはまた格率とも違ふ。格率は主觀の意志に対してのみ妥當するが、實踐的規則は凡ゆる理性的存在に妥當する。且つ之れは欲求せられた結果に關せず、たゞ意志を意志としてのみ規定する。従つて其れは定言的である。定言的命令こそ眞の道德的法則である。

定言的命令としての道德的法則は、従つて當然實質のない形式に於てのみ存在することとなる。所がかゝる單なる形式は最早感性の対象ではなく、従つて亦現象には屬せずして唯だ理性によつ



てのみ考へ得られるものである。故に此の形式の表象は自然界の出来事の如何なる規定原理とも異つて、唯だ意志のみの規定原理である。若し意志に取つて法則たり得るものは普遍的立法形式以外にないとするれば、この様な意志は因果律には従属しない。所で因果律に全然従属しない独立性を先験的意味に於ける自由といふならば、意志は正に自由である。

意志の自由はかくて無制約的な道徳的法則を立てる意志の立法的形式性に求められた。が然らばその立法するに当つて意志は如何にしてかゝる無制約的道徳律を認識するか。勿論自由の認識からではない。自由そのものは理性によつて積極的には認識せられないから。経験からでもない。経験から推論されるものは因果必然の自然の機制のみである。残るところは直証のみである。我々が自ら意志の格率を計画するや否や道徳律は意識に直接現はれ、疑ふべからざる根本的事実として確信せられるのである。が之れと同時に自由も亦確証される。「或事を為すべしといふ事を意識するが故に、これを為し得ると判断し、そして道徳律がなければ決して知られないところの自由をわがうちに認識する。」

道徳律はかくて自由の認識根拠であるが、道徳律の媒介によつて認識せられる自由は、道徳律の特質を反映して、第一経験的実質的限定から純粹であり独立であり、第二自律的に自己の立てた法則にのみ従ふ。意志にかくの如き自由があればこそ、其は他の自然的條件によつて制約される仮言的命法としての道徳ではなくして、飽く迄も自己を目的とする定言的命法としての道徳律を成立せしめる唯一の條件となり得る。さればこそ自由なる意志は眞

の道徳の存在根拠であると言はれるので、道徳律と自由意志とはかくの如くにして、交互關係を保ちつゝ、こゝに自然の世界とは異なる當為の世界を形成する。當為の世界は如何なる内容もない單なる形式の世界である。けれどもその形式的なることの故に、其れは却つて凡ゆる、経験的判断と共にあつて、経験的判断をして單なる事実判断に終らしめず、それに道徳的意味を与えることが出来る。又當為は單なる願望ではなくして、苟も人が理性的存在である限り、万人の理想であり万人によつて実現せらるべき嚴肅なる事実である。固よりこれが具体的事実となつて現はれるかどうかは今の直接の問題ではなく、重要な事は寧ろかゝる事実としての當為が理性によつて確証されてゐるかどうかである。事実上の實現には既に感覺的條件が混入するからである。又かゝる當為の世界は自然的秩序とは異なる別系統の秩序に属するが故に、理論理性が之を対象化して認識する事は不可能である。たゞ此れは実践的に行証せられ信証せらるべきものである。行はうとする意志、信じようとする心もなく、唯、これを觀ようとする者に取つては、かゝる超感覺的世界は空名に過ぎない。これに実を与ふるものは唯、行信のみ。而して當為のかゝる世界を、彼の感覺的自然界に做つて自為といふならば、此れは「自律的意志の下に立つ自然」である。感覺的自然界は因果的法則によつて支配せられて生起する無限の連続であつて、此処では終に最後の原因性に撞着することとは出来ない。が當為の法則によつて支配せられる自律的意志の下に立つ超感覺的自然に於ては、最早これ以上他に原因を求める必要はなく、それ自らが常に端的な始めであり絶對的な初発であ

る。凡ての創造は此れから始まる。そして此処にこそ正に自由な意志、実在としての意志がなければならない。かつて我々は自由の何であるかを観、何であるかを知らうとした。が然し其れは終に二律背反に終つた。意志の自由と実在性は、道德的法則を疑ふべからざる事実として確信する者によつてのみ確証されるのである。

#### 引用書

- |     |           |          |
|-----|-----------|----------|
| カント | 純粹理性批判、上下 | (天野貞祐訳)  |
| 〃   | 実践理性批判    | (波多野精一訳) |
| 〃   | 道德哲学原論    | (宮本和吉訳)  |
|     |           | (安倍能成訳)  |
|     |           | (藤原正訳)   |